薩摩焼・苗代川産摺鉢の口縁形態

渡辺　芳郎（鹿児島大学法文学部）

はじめに

摺鉢（擂鉢）とは、口の開く鉢の内面に放射状の溝（以下「櫛目」）を入れ、木製のスリコギで、ゴマや味噌などの食材をすりつぶすための調理具である。先行して存在して捏鉢（練鉢）に、中世に櫛目を施すことで摺鉢が出現した。以後、摺鉢は日本各地の窯業地で生産され、昭和時代まで必須の日用調理具として定着していた。

摺鉢は使用とともに内面の櫛目が摩耗して機能を失い、買い換える必要が生じることから、窯業地としては、継続的な需要が見込める重要な商品であった。近世薩摩焼では、苗代川窯跡群（鹿児島県日置市美山）、山元窯跡（姶良市加治木町、関編一九九五）、竪野冷水窯跡（鹿児島市冷水町、戸崎他編一九七八）などから出土している。また明治時代、苗代川陶工の居住地もしくは作業場であったと推測される雪山遺跡でも摺鉢が多数出土している（宮田他編二〇〇三）。近世では苗代川における摺鉢の生産量が卓越しており、島津領内の消費地遺跡で出土する摺鉢は、肥前産摺鉢や堺・明石系摺鉢が少数見られるものの、苗代川産が大部分を占めている（橋口二〇〇二、渡辺二〇〇二・二〇一〇）。

後述するように苗代川堂平窯跡（一七世紀）出土の摺鉢（以下「堂平摺鉢」）と雪山遺跡（一九世紀

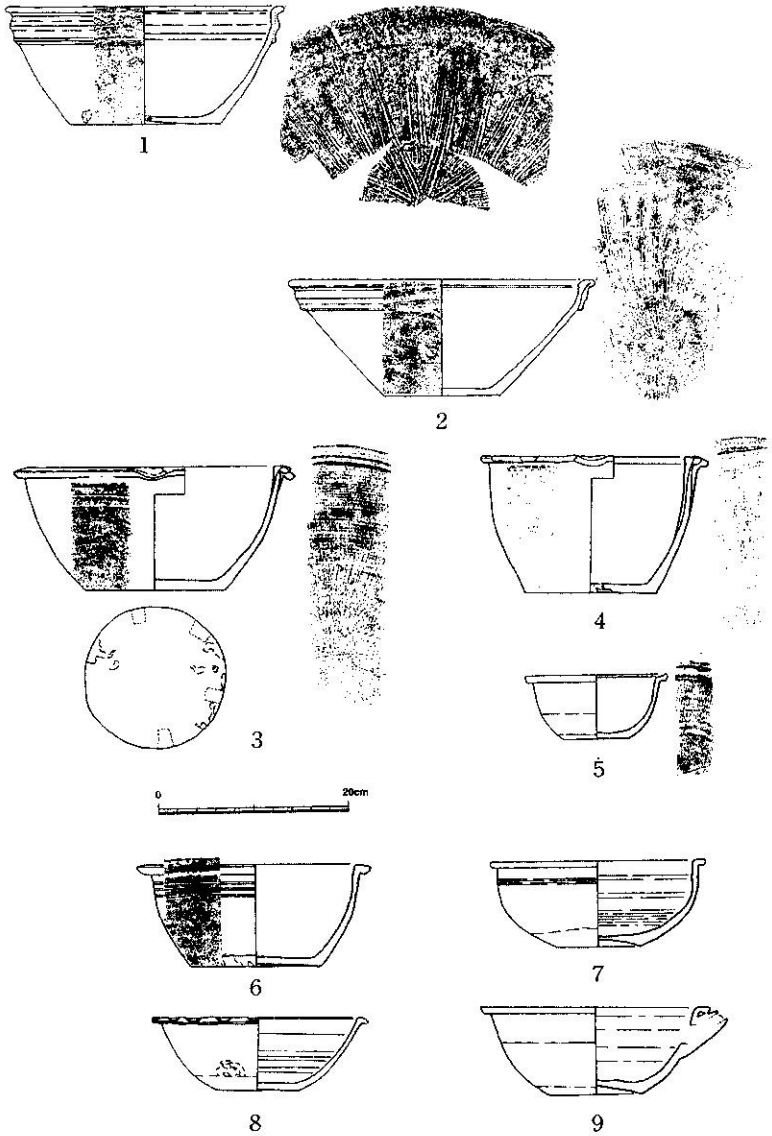
後半）出土のそれ（以下「雪山摺鉢」）とは、同じ苗代川で生産されたとはいえ、器形・製作技法に大きな差異が見られる。本稿では口縁形態を中心に両者を比較することで、苗代川における摺鉢生産の変化について予察を述べたい。予察とする理由は、両遺跡の間の時期、つまり一八～一九世紀の苗代川窯跡群の発掘調査は進んでおらず、その具体相がいまだ不明だからである。なお一九世紀中頃～幕末の南京皿山窯跡が発掘調査されているが、磁器窯であり、摺鉢の生産は確認されていない（渡辺・金田二〇一二）。

一．堂平窯跡における摺鉢の口縁形態（図一）

堂平窯跡（関・繁昌編二〇〇六）は苗代川窯跡群に所在する。発掘調査により全長約三〇ｍの単室登窯跡が検出され、その周辺に溝跡、物原、工房跡と推測される柱穴群などが確認された。出土した資料については、「溝内出土遺物：堂平Ⅰａ期（一六二〇～三〇年代）」「物原Ⅰ出土遺物：堂平Ⅰｂ期（一六三〇～五〇年代）」「物原Ⅱ出土遺物：堂平Ⅱ期（一七世紀後半）」という編年案が示されており（同上三六九―三七六頁）、本稿もこれに従う。

ところで筆者はかつて堂平窯跡出土製品の口縁形態について五種類に分類した（図二・表一、渡辺二〇一一）。器種と口縁形態との間には強い関係性が見られ、摺鉢に見られる口縁３類は、他の器種に使われていない。また３―１類は主としてⅠ期、３―２類はⅡ期と時期差があり、口唇部が次第に幅広になっていく傾向がある。

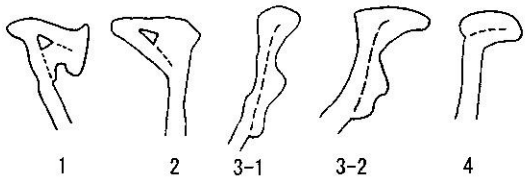
ところで薩摩に朝鮮陶工が渡来した一六世紀末、朝鮮において摺鉢は生産されていなかったという（片山二〇〇四　四五〇頁）。それゆえ初期の苗代川陶工にとって、甕や壺などすでにその製作技法を習得してい



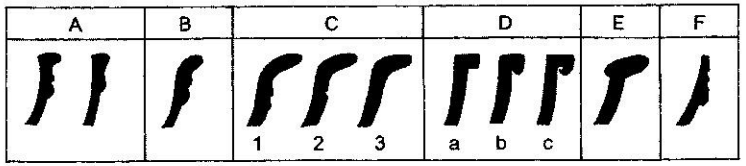
図一　堂平窯跡・雪山遺跡出土の摺鉢など（関・繁昌編 2006，宮田他編 2003 より）1・2：堂平摺鉢，3～5：雪山摺鉢，6～8：雪山練鉢，9：雪山片口

表一　堂平窯跡出土製品の口縁形態（渡辺 2011）

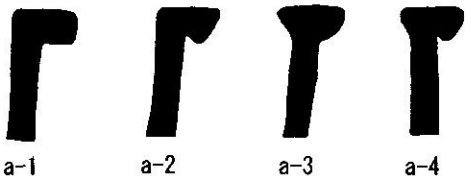
口縁形態		器種
1 類	器壁上端を外側に折り返し、上端に平坦面を作る、断面T字型を呈するもの	甕・壺（大）
2 類	器壁上端を外側に折り返し、上端に平坦面を作る、断面三角形を呈するもの	甕（Ⅱ期）
3 類	器壁上端を外側に折り返して肥厚させ、器壁との接触面を強くなでつけることで二条ほどの突帯を作るもの	摺鉢
3-1 類	口唇部を丸くおさめるもの	
3-2 類	口唇部内側に稜を作り平坦面を作るもの	
4 類	器壁上端を内側に折り返して、やや丸みを帯びた平坦面を作るもの	壺（小）・片口・蓋
5 類	その他（直口など）	蓋（一部）



図二　堂平窯跡出土製品の口縁形態（渡辺 2011，5 類は省略）



図三　薩摩焼摺鉢の口縁形態（渡辺 2000）



図四　雪山遺跡出土摺鉢の口縁形態（宮田他編 2003 より）

た器種とは異なり、摺鉢は日本に来て初めて製作する器種であった。その際にモデルとしたのが、当時、西日本に広く流通していた備前摺鉢であった可能性が、堂平摺鉢の櫛目や口縁形態から推測される（関・繁昌編二〇〇六　三七二頁、渡辺二〇一一　一〇頁）。ただし焼締陶器である備前摺鉢の窯詰めが正置の重ね焼きであるのに対し、施釉陶器である堂平摺鉢は口唇部を釉剥ぎした合わせ口による重ね焼きであった。甕や壺に用いられていた貝目積み技法が摺鉢にも導入されるとともに、口縁部は次第に外側に長く延びるようになったと考えられる（関明恵氏ご教示）。筆者はかつて薩摩焼摺鉢の形態分類と編年を試みたが（渡辺二〇〇〇）、その中で分類した摺鉢口縁B類が堂平摺鉢のそれに該当し、C類へと変化すると考えている。そしてC類では、外側折り曲げによる肥厚は見られなくなり、肥厚部押さえつけによって生じた口縁下の凸帯は装飾となり、さらに沈線や無文となる（図三）。つまりモデルの備前摺鉢から次第に離れていくと言えよう。

二．雪山遺跡における摺鉢の口縁形態（図一）

雪山遺跡は、堂平窯跡と同様に日置市美山に所在する（宮田他編二〇〇三）。本遺跡は近傍にある雪之山窯で製陶に従事した陶工たちの居住地跡もしくは作業場跡と推測されている。雪之山窯の操業期間は明治二〇～三〇年代とされることから、本遺跡出土資料も同時期と考えられる。ただし出土遺物には、多くの同種同形のものや、焼き歪みの大きい陶器などを含む「生産地的様相」を示す資料と、雪之山窯あるいは苗代川産ではないと考えられる陶磁器、つまり陶工たちが使用した「生活地的様相」を示す資料とが含まれている。本稿では「生産地的様相」として報告されている資料を検討対象とする。また同一器種を数多く含む土坑3出土資料も生産地的様相に近いことから対象に含める。

報告書によれば、雪山摺鉢は口縁部形態からA～Dの四種類に分類されているが（同上七七頁）、口縁部を外側に短く折り返している点では共通しており、成形最終段階のナデ調整によって形態に差異が生じたと考えられる。つまり四つの独立・並立した分類単位とするより、「口縁部折り曲げ」という共通技法による四つの小変異と考える。それゆえ図四・表二のように再分類する。

一方、雪山遺跡出土の練鉢は口縁形態以外に口縁下の沈線や器高の高低など別の属性も含めて分類されているが（同上七二頁）、口縁形態のみを抽出すると、基本的に摺鉢のa―1～3の形態と一致する。また鉢Eとされる口縁端部を指押さえで波状に処理する口縁形態も、口縁部を外側に短く折り返す点では摺鉢の口縁と共通する。これをa―5（図一―8）とする。また鉢Fは注ぎ口を作る片口であり、口縁はa―1を作る（図一―9）。以上のように、摺鉢・練鉢・片口という三器種は、同じ技法の口縁を共有していることがわかる。

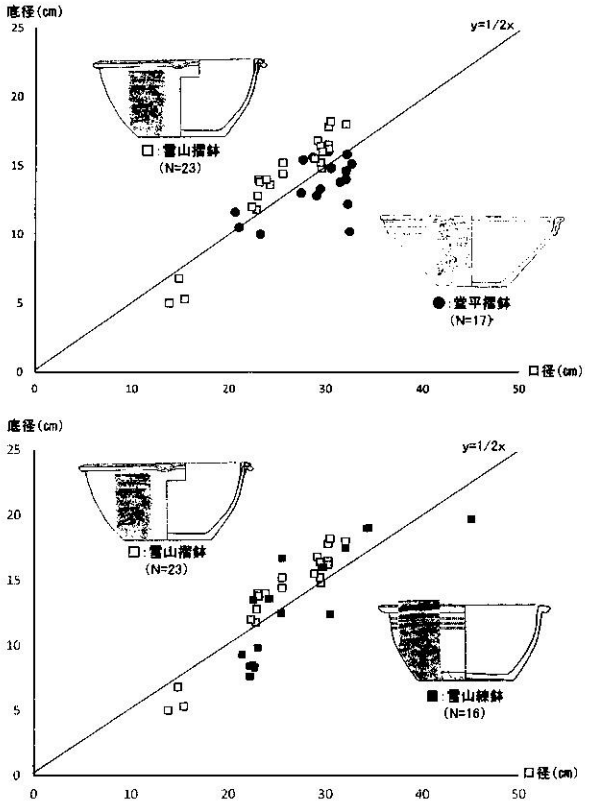
鉢類以外では、甕の口縁形態には断面逆三角形のものと、外側に折り返してナデで調整するものの二者がある。前者は、堂平Ⅱ期に登場する肥前甕を模倣した口縁形態（渡辺二〇一一の口縁2類、図二）から変化した形態と推測され、後者は上記の鉢類におけるそれと同じ成形技法と言える。壺では断面逆三角形、外側折り返しの逆L字状口縁などが見られる。つまり鉢類に見られるa―1～5類の口縁形態が甕や壺などにおいても採用されていることが指摘できる。

三．口縁形態の違いが意味するもの

以上、堂平窯跡出土の一七世紀の摺鉢と雪山遺跡出土の一九世紀後半のそれの口縁部の特徴について整理してきた。本章では両者の違いとその意味を検討したい。

表二　雪山遺跡出土摺鉢・鉢・片口の口縁形態

口縁形態		雪山報告分類	摺鉢	鉢					片口
				A	B	C	D	E	
a-1	口縁部を外側に短く折り返すのみ	摺鉢B	●		●				●
a-2	口縁部を折り返したのち下端を肥厚させ断面三角形にする	摺鉢C	●	●	●	●	●		
a-3	口縁部を折り返したのちナデにより口縁上端が内側にやや張り出し、断面がT字状をなす	摺鉢A	●			●			
a-4	口縁部を折り返したのちナデにより口縁上端が内側にやや張り出し、また口縁下端を肥厚させ断面三角形とする	摺鉢D	●						
a-5	口縁部を折り返し口縁端部を指押さえで波状に処理する	鉢E						●	



図五　摺鉢・練鉢のプロポーション（口径／底径）

堂平摺鉢の口縁も、雪山摺鉢のそれも、変異（時間的変化を含む）を有しているが、それぞれが同一の技法で製作されていることが指摘できる。しかし両者の違いは、前者が他の器種において見られない摺鉢独特の形態であるのに対し、後者は摺鉢以外に練鉢や片口などの口縁にも作られ、一部は甕・壺などにも類例が見られる点である。

ここで摺鉢のプロポーションについて検討したい。筆者はかつて口縁B類（図三、堂平摺鉢の口縁3類に該当）を作る摺鉢と、口縁D類（図三、雪山摺鉢の口縁に該当）のそれとの間に、口径／底径の比に差異があり、それが時間差であることを指摘した（渡辺二〇〇〇　一六五―一六六頁）。つまり前者の底径が口径の一／二以下で、器壁が外に大きく開くのに対し、後者は一／二以上で、全体形が寸胴になるという違いである。同じ比較を堂平摺鉢と雪山摺鉢で行うと、同様の結果が得られ（図五上）、プロポーションの差異を時間差とする筆者の仮説は支持される（ただし口径一五cm前後の小型の餌摺鉢は異なるプロポーションを取る）。次いで雪山遺跡出土の練鉢について同様の比率を検討すると、摺鉢とほぼ同じ寸胴のプロポーションをとることがわかる（図五下）。

先述したように雪山遺跡では、口縁形態においても摺鉢と練鉢とでは共通する。口縁形態とプロポーションにおける一致は、摺鉢が練鉢に櫛目を加えることで完成すること、逆に言えば、口縁作りまでを含む全体の成形が終わった段階で、練鉢にするか摺鉢にするかが選択された可能性を示唆すると言えよう。一方、堂平摺鉢の口縁形態は他の器種には見られない独特のものであり、成形が終了した段階で、摺鉢以外には転用されないことを意味している。

渡来初期の朝鮮陶工が備前摺鉢をモデルにした可能性はすでに述べた。朝鮮において摺鉢製作の経験

のなかった陶工たちにとって、摺鉢の形態とは備前摺鉢であったのだろう。それに対して雪山遺跡の時期の摺鉢は、甕、壺などと同様、主力製品の一つとなっていた。それゆえその口縁形態は、モデルであった備前摺鉢に縛られることなく、形態的に近い練鉢や片口、さらには甕・壺などと「代替可能」なものになっていたと推測される。

さらに摺鉢と練鉢とで成形工程を共有することは、生産における省力化・効率化を意味していると考えられる。今のところ、十分に数字的なデータは示し得ないが、消費地遺跡では、堂平窯段階の摺鉢の流通量に比べると、雪山遺跡段階のそれの方がはるかに多かったと推測される。つまり流通量（需要）の増大と連動する生産量の増大に対して、生産工程の省力化・効率化によって対応したと推測することができる。

以上のように、堂平摺鉢の口縁形態と雪山摺鉢のそれとの違いは、時間的な差異を示す指標であるとともに、両時期における摺鉢の生産量・生産効率の違いの一端をも示している可能性を指摘したい。

おわりに

近世における苗代川は、甕・壺・摺鉢など比較的大型の陶器生産が主体であり、薩摩藩領内に広くかつ大量に流通していた。他の窯の製品は少なく、圧倒的なシェアを有しており、その具体相の解明は近世鹿児島における陶磁器の生産・流通を考える上で重要である。しかし冒頭でも触れたように、その考古学的調査はけっして十分ではなく、堂平摺鉢と雪山摺鉢との型式学的な関係についても、現段階では明確でない。それゆえ本稿で示した予察もいささか拙速であるという批判は免れないであろう。今後の資料の増加を期待しつつ、改めて検証する機会を待ちたい。

参考引用文献

片山まび二〇〇四「倭城出土の陶磁器に関する予察―日本出土品を視座として―」『韓国の倭城と壬辰倭乱』四三三―四六三頁　岩田書院　東京

関明恵・繁昌正幸編二〇〇六『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター　鹿児島

関一之編一九九五『山元古窯跡』加治木町教育委員会　加治木（現姶良市）

戸崎勝洋他編一九七八『竪野（冷水）窯址』社団法人鹿児島共済南風病院　鹿児島

橋口亘二〇〇二「鹿児島県地域における一六～一九世紀の陶磁器の出土様相―鹿児島県地域の近世陶磁器流通―」『鹿児島地域史研究』一　三―一四頁

宮田洋一・関明恵・三垣恵一編二〇〇三『雪山遺跡・猿引遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター　鹿児島

渡辺芳郎二〇〇〇「近世薩摩焼摺鉢考」『鹿児島考古』三四　一五三―一六九頁

渡辺芳郎二〇〇二「鹿児島県・宮崎県における肥前陶磁」『国内出土の肥前陶磁―西日本の流通を探る』六七九―八三五頁　九州近世陶磁学会　有田

渡辺芳郎二〇一〇「鹿児島城下出土の陶磁器と薩摩焼」『季刊考古学』一一〇　四八―五一頁

渡辺芳郎二〇一一「重ね焼き技法から見た初期薩摩焼の技術変容―堂平窯跡出土資料を中心に―」『鹿大史学』五八　一―一三頁

渡辺芳郎・金田明大二〇一二『考古学と地下探査の協同による近世薩摩焼研究再構築のための基礎的研究』平成二一～二三年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　鹿児島大学法文学部鹿児島

亀井明徳氏追悼・貿易陶磁研究等論文集

亀井明徳氏追悼・貿易陶磁研究等論文集
発　行　日　二〇一六年四月二〇日
編集・発行　亀井明徳さん追悼文集刊行会
印　　刷　株式会社　光　邦